

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	高萩 智也
主 論 文 題 名：				
デイヴィッド・ヒュームの社会的な認識論				
(内容の要旨)				
本論文は、デイヴィッド・ヒューム (David Hume 1711-76) の哲学における知識の理論、すなわち認識論 (Epistemology) を主題として、私たちの認識活動の社会性を論じるものである。 ヒュームは、主に『人間本性論』(全三巻)において、「人間学 (the science of man)」を展開した。この人間学は、もっぱら「経験と観察 (experience and observation)」にもとづいて、人間の認識能力を批判的に吟味検討し、それが妥当に機能する領域と範囲を明らかにしようという試みである。これには、道徳や政治、文芸批評にとどまらず、数学や自然科学まで含めた、あらゆる学問を基礎づけなおそうというねらいがあった。ヒュームの人間学は、一種の科学方法論の提示だったのである。 しかし、伝統的に、ヒュームの試みは失敗に終わったと理解されてきた。というのも、『人間本性論』第一巻の結論において、ヒュームはあらゆる事柄について判断を下すことができなくなる「全体的懐疑論 (total scepticism)」に陥ったことを自ら告白するからである。こうして、哲学史におけるヒュームは、極端な懐疑主義者として、そして、イマヌエル・カントの超越論を準備した存在として、扱われてきた。 他方、ヒューム研究の内部では、20 世紀の中頃から終わりにかけて、懐疑主義解釈よりも自然本性主義解釈や、自然主義解釈が主流になりつつある。これらの解釈によれば、ヒュームは実際に懐疑主義に陥ったわけではない。人間の自然本性 (human nature) の解明を通して、極端な懐疑論によっても疑いえない私たちの探究の枠組みや、私たちが懐疑論へと陥ってしまう心理学的なプロセスおよびメカニズムを明らかにした、というのである。 とはいえ、自然本性主義解釈や、自然主義解釈は、少なくとも二つの点で不十分である。第一に、これらの解釈は、ヒュームは確かに極端な懐疑論者ではないかもしれないが、何らかの意味では懐疑論者である、ということを十分に説明できていない。彼はいくつもの著作のうちで懐疑主義的な主張にコミットしている。そこには、探究の枠組みや心理学的事実を超えた規範的主張をみてとることができる。第二に、より大きな問題として、これらの解釈は、私たちの認識活動がもつ社会的な側面についてヒュームが論				

じたことを、ほとんど捉え損ねている。私たちは、日常生活や学問における認識活動のなかで、自分一人の力だけで知識を獲得しているわけではない。保護者や教師による教育、他人の証言、専門的な書籍、あるいは歴史的資料といった方法を通して、知識を獲得するのである。ヒュームはこうした事実に関し、分析を行っている。懐疑主義解釈と自然本性主義解釈や自然主義解釈は、一見全く対立しているように見えて、等しく、こうした社会的な認識活動をめぐるヒュームの議論をおさなりにしてきた。

本論文の目的は、人間の認識活動がもつ根本的な社会性、また、学問的探究に代表される社会的な認識活動をめぐって展開されたヒュームの議論を総合し、体系的に再構成することである。これは、ヒュームの認識論を社会的な認識論として再構成し、その内実を詳らかにする、ということの意味する。

ヒュームは『人間本性論』のいくつかの箇所において、確かに、自分自身の哲学探究を「解剖学 (anatomy)」に準えている。それは、読み手に対して、解剖台の上に載せられた物体としての人間をイメージさせる。そのような人間は、社会や共同体から切り離されている。しかし、他方で、ヒュームは『人間本性論』の序論において、「精神哲学 (moral philosophy)」における人間は決して物体と同じように探究されてはならない、と論じる。曰く、「人間本性の学問においては、実験結果を人間生活の注意深い観察から、つまりは世界の通常の成り行きにおいて、人々の交際や仕事、娯楽によってそれが現れる通りに収集しなければならない」のである。そうであるならば、認識という活動もまた日常生活のなかで行われる通りに、つまり、社会的な営みとして、分析されなければならない。そして、ヒュームは実際にそうした分析を行っているに違いない。本論文は、これらの汲み尽くされてこなかった分析からヒュームの認識論を捉え直すことをねらっている。

前段で述べた目的を達成するにあたって、本論文は、ヒュームのテキストに内在的に読解し解釈するという、哲学分野におけるヒューム研究では標準的な、文献研究の方法を採用する。ただし、ヒュームの認識論に関するこれまでの研究では『人間本性論』第一巻や『人間知性研究』がもっぱら解釈の対象となってきたのに対して、本論文では、『人間本性論』第二巻・第三巻、『道徳政治文学論集』や『道徳原理研究』、さらには書簡などまで含めて解釈を進める、という方法をとる。それは、ヒュームの社会的な認識論を再構成するためには、「社会 (society)」そのものをめぐってヒュームが議論を展開した箇所から人間社会に関する彼の洞察を明らかにする必要があるからである。

本論文は、二部・七章から構成されている。第Ⅰ部「ヒュームの認識論」のねらいは、ヒュームの『人間本性論』第一巻と『人間知性研究』の読解を中心として、「認識とは何か」、言い換えれば「何をしたら認識したことになるのか」という問いに対する彼の答えを明らかにすることである。ヒュームは、人間の知性を感覚や記憶、想像力や理性といった能力の束とみなし、それらの能力を相互作用させることによって、私たちは心の外の世界を心のうちに思い描くことができる、と考えた。では、こうした能力をどのように用いることによって、世界についての正しい認識へと、さらには学問的な認識へと私たちは到達するのか。また、それらの能力が妥当に機能する領域はどこまでか。これらの問いをめぐるヒュームの議論を再構成することが、第一部の目的である。

第1章「表象能力としての「記憶」」では、ヒュームにおける「記憶 (memory)」の働きを論じる。そこでは、ヒュームの観念説を概観した後、「印象 (impression)」を「観念 (idea)」として心のうちに表象/再現前させる能力としての記憶の性質や機能を明らかにする。本章では、記憶による想起を認識未満のものとみなすデフレ的な解釈が提案される。これは、ヒュームにとっては認識という営みが、外的世界についての情報をただ受動的に心のうちで反復するものではなく、それをふまえて認識主体が能動的に構築するものである、ということを示している。

第2章「外的世界を心のうちに再構築する「想像力」」では、ヒュームにおける「想像力 (imagination)」の働きを論じる。とりわけ、外的世界を心のうちに能動的に再構築する能力としての想像力の働きを、「関係 (relation)」をめぐるヒュームの議論から詳らかにすることが本章のねらいである。ヒュームによれば、私たちの認識活動は関係の認識を単位として成立する。関係には「自然的 (natural)」なものと「哲学的 (philosophical)」なものがあり、人間の認識活動は最終的に後者すなわち「哲学的関係」の認識へと到達することを目指している。本章では、任意の関係は関係の概念を含んで認識されるときに哲学的関係となり、それは人間にのみ可能である、という解釈を提示する。

第3章「「因果推論」による信念の獲得と修正」では、ヒュームにおける「因果推論 (causal inference)」を扱う。ヒューム曰く、因果推論とは、認識主体が直接に経験したことのない物体や出来事、あるいはそもそも原理的に直接経験しえない物体や出来事の存在や性質を知るために用いられる手段である。この因果推論について、本章では次の一連のことを示す。すなわち、第一に、因果推論は動物や幼児も行いうる原初的な認識活動であること。第二に、そうした因果推論はまさにその原初性ゆえにしばしば誤った認識や偏見をもたらすこと。第三に、したがって、私たちは適宜信念を修正しなければ

正しい認識にたどりつくことができないということ。要するに、因果推論とは、ひいてはヒュームにとっての認識活動とは、時間性を持った経時的なものなのである。

第4章「経験を拡張する「証言」」では、ヒュームが因果推論の一種とみなしているところの「証言 (testimony)」を扱う。とりわけ、証言にもとづいた知識の獲得という営みをめぐる彼の主張と立場を明らかにすることが本章のねらいである。ヒュームは、証言にもとづいた知識獲得の可能性を全く否定した哲学者としてしばしば批判されてきた。しかし、近年の解釈者たちが論じているように、そうした批判は的外れなものである。ヒュームは、認識主体が証言から知識を獲得するためには知覚的知識による正当化が常に必要だとは論じていないし、ましてや、いかなることについて知るためにも直接的な経験や観察が必要である、という理想的なまでに自律的な認識主体を措定してはいない。本章では、ヒュームにとって「証言」は、事実についての知識だけでなく、それを獲得するための認識規範・規則を伝達しうる手段ですらある、ということを明らかにする。

第Ⅱ部「ヒュームにおける認識の社会性」のねらいは、『人間本性論』第一巻に限らずヒュームのさまざまな著作や書簡を解釈の対象とし、第一部で示したような人間知性の働きに支えられた認識活動が社会的に制約されていると示すことにある。ヒュームによれば、「私たちは何を知りうるか」という問いに対して私たちが与える答えには、留保がつけられることになる。というのも、ヒュームの考えでは、各々の人間知性はそれ自体で自らを支えることができず、したがって、適切に働くことができないからである。これは、人間は社会的で活動的な生き物として、相互に承認され、その中でのみ正常な認識活動を営むことができるということを意味している。ひいては、社会にとって有用で重要な真理を共同で探究する学問的な認識活動も、この制約のもとに成り立っている。これらの事柄を示すことが、第二部の目的である。

第5章「「全面的懐疑論」と認識活動の根本的な社会性」は、本論文の最も重要な章である。そこでは、なぜヒュームは『人間本性論』第一巻の結論部分において、一時的とはいえ、「全面的懐疑論」に陥ったのか、という問いを扱う。ヒュームは『人間本性論』第一巻の本論において、人間が自分の信念に対して修正を重ね続けると、あらゆる事柄を信じられなくなる全面的懐疑論が導出される、と論じつつ、それを退けていた。しかし、彼は『人間本性論』第一巻の結論に到達したとき、その全面的懐疑論を退けることに失敗し、全面的懐疑論に自ら陥る。本章では、その原因を「絶望的な孤独 (forelorn solitude)」という結論独自の文脈に求めつつ、『人間知性研究』や書簡においてヒュームが人間の社交性を強調していることに注目することによって、彼が認識活動を相互承

認にもとづいた根本的に社会的なものとみなしていた、ということを明らかにする。

第6章「学問的な認識活動を動機づける「真理愛」」では、ヒュームにおける「真理愛 (love of truth)」と「好奇心 (curiosity)」の情念を扱う。本章では、これらの情念をめぐるヒュームの議論を読解し、学問的な認識活動を動機づける情念としてヒュームの体系に位置づけられた真理愛にとって、追究する真理の重要性と有用性という条件が本質的であることを明らかにする。これまでの研究では、この条件ではなく、むしろ真理を追究することそれ自体に伴う快という条件が真理愛の本質であると考えられてきた。しかし、ヒュームは、例えば『人間知性研究』において、自分自身の哲学が古代の懷疑派やピュロン主義者のそれとは異なるということを主張するなかで、自分自身は彼らとは異なって有益な真理を追究していると繰り返し論じている。本章では、それが単なる強弁ではなく、次の理由によることを明らかにする。すなわち、信念の修正を繰り返すというプロセスを必要とする学問的な認識活動が継続されるためには、認識主体がその認識活動の対象に強くかつ継続的に注意を固定していなければならない、それには、まさにそうした注意の固定を可能にするところの、追究する真理の重要性と有用性という条件が必ず必要になる、と。

第7章「学問的な認識活動における「行儀の規則」」では、礼儀作法やマナー、エチケットといった「行儀の規則 (the rules of good-breeding)」をめぐるヒュームの議論を扱う。ヒュームによれば、キリスト教の伝統に反して、「誇り (pride)」という情念（感情）はそれを持つ人自身にとって、それ自体で快く、また目的を達成するために有益である。しかし、人間は誰しも過大な誇りを持っている一方で、他人の過大な誇りを見せつけられると、自分の誇りを傷つけられてしまう。そしてそのことによって、不快になってしまう。そこで、もし私たちが自分の誇りを他人に対して直接に表現するようなことがあれば、私たちは互いに憤慨し、人的交流が途絶えてしまう。ヒュームによれば、礼儀作法やマナーといった「行儀の規則」の主たる機能は、誇りの情念それ自体を適切な程度に抑え、それに応じて行為においても誇りの直接的な表現を控えさせる、ということにある。この行儀の規則は、認識活動にとっても重要な含意を持つ。なぜなら第4章で論じたように、私たちは、しばしば証言によって、他者と知識を交換するからであり、また、第6章で論じたように、学問的な認識活動は社会的なものだからである。本章では、これまでの研究では注目されてこなかった会話の流れに関するヒュームの議論に目を向けることによって、私たちにはむしろ誇りを積極的に表現すべき場合がある、という主張をヒュームのテキストから導く。

Thesis Abstract

No. 1

Registration Number	☐ "KOU" ☐ "OTSU" No. *Office use only	Name	Tomoya Takahagi
Thesis Title			
A Social Epistemology of David Hume			
Thesis Summary			
This dissertation reconsiders David Hume's epistemology by foregrounding its intrinsically social dimension. Although Hume has often been portrayed either as a thoroughgoing radical skeptic or as a naturalistic philosopher, both interpretive options risk overlooking his repeated insistence on the communal and interactive nature of human knowledge and cognitive activity. Drawing not only on <i>A Treatise of Human Nature</i> but also on <i>An Enquiry concerning Human Understanding</i>, the <i>Essays, Moral, Political, and Literary</i>, and Hume's letters, this dissertation demonstrates that his account of how we come to know the world is inseparable from the social contexts in which inquiry takes place. The dissertation is organized in two parts with seven chapters. Part I, "Hume's Epistemology," reconstructs the core of Hume's theory of knowledge, focusing on the interplay among various cognitive faculties. Chapter 1 explores memory primarily as a representative capacity rather than a direct source of knowledge, showing that Hume treats recollection as a precursor to—but not itself a source of—belief; this is the "deflationary" account of memory. Chapter 2 analyzes imagination as the faculty that actively reconfigures external data through the concept of "relations," ultimately guiding us toward a distinctly "philosophical" understanding of the world—an achievement available only to human beings. Chapter 3 addresses causal inference, the mechanism by which we form beliefs about unobserved entities, revealing how Hume identifies both the promise and the perils of this everyday yet fallible cognitive process. Chapter 4 investigates testimony as a means of extending our experiential knowledge. Contrary to certain traditional readings, Hume does not require direct observation for all justified beliefs; instead, he recognizes that testimony transmits not only information about objects and events but also the epistemic norms underlying those beliefs. Part II, "The Social Dimension of Hume's Epistemology," illuminates how Hume's broader writings, such as <i>Essays</i> and <i>Enquiries</i>, emphasize the communal underpinnings of our cognitive process, in daily life as well as in scientific inquiry. Chapter 5 explains why Hume momentarily succumbs to "total skepticism" at the end of <i>Treatise</i> Book 1, attributing it to a sense of "forlorn solitude." It then shows how social interaction and mutual recognition enable him to overcome radical doubt—an account that, I argue, applies to all human beings. Chapter 6 turns to Hume's treatment of the love of truth and curiosity, contending that the ongoing pursuit of knowledge depends on regarding truth as both important and useful—an affective condition that sustains our cognitive efforts. Chapter 7 examines Hume's account of "the rules of good-breeding," through which individuals regulate not only the expression of pride but pride itself, thus maintaining constructive discourse and preserving the social fabric critical to shared inquiry.			

By recasting Hume's thought as a fundamentally social epistemology, this dissertation demonstrates how the communal and emotional dimensions of human life are indispensable for avoiding unchecked skepticism and guiding us toward the truths we can discover.